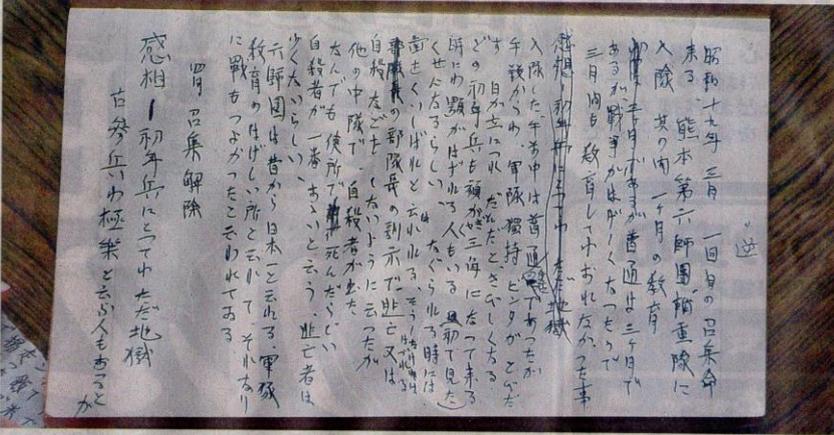


過酷な軍内暴力詳述

2021.3.16

自殺者も 「日常的、上官から」

亡父の中国従軍記発見



上官による日常的な暴力など過酷な軍隊生活をつづった故・福留利光さんのノート（一部）

穎娃・福留さん



福留光子さん

南九州市穎娃町御領の福留光子さん(65)宅で、父利光さん(1997年に74歳で死去)が太平洋戦争の従軍体験を記したノートが見つかった。戦闘場面はほとんどない代わりに、自殺者を出すほどの上官による日常的な暴力があり、軍の体質そのものが命の脅威だった様子を伝える。戦後生まれの光子さんは「私にしているのは、父が生き抜いたおかげと改めて感じた」と話す。

つたぐま 語り 戦争日記

ノートは55年判で、昨年末に古い机の引き出しから見つかった。利光さんが戦後に書いたとみられる。破れたものを入れて19分ある。記述によると、利光さんは44年に穎娃から召集され、熊本の陸軍第六師団で訓練を

受けた。翌年21歳で再度召集があり、満洲から中国南部の汕頭まで列車や船で移動を繰り返した。途中で海戦や海戦による死者を目撃したが、所属する陸軍の山

光子さんは「現地ではしたたかさも必要だったのだらう」と推し量り、「つらい中でも優しい人に助けられ、生き残れた父は幸運だった」。文章を活字化して残すことも考えている。(藤本祐希)

砲隊が戦闘することはなかった。一方で、上官による暴力の記述が目立つ。利光さんも歩哨の仕事を批判され「大分なぐられた(原文のまま)」とある。後でほかの兵も同様の仕打ちを受けたと知り、嫌がらばと気付いた。暴力を苦にした自殺者の記述も複数ある。光子さんは利光さんから「生きていても殴られるし、いつ死んでもいい」という気持ちになつた」と聞いたという。現地では誰も「腹がへって食う事だけしか考へない」状況で、食糧の見張りの際、帯剣で箱を開け缶詰を盗む方法を兵長に教わつたことも率直に記している。

仲間と軍馬用のトウモロコシを盗もうとして見張りに見つかった時は「どんなひどい目にあうか」とおびえていたが、見張りは優しい人で、本土のことをしきりに聞く代わりにはトウモロコシを食べるのを許し、たばこも吸わせてくれたと記す。